

中学校三年生の佐藤さんのクラスでは、国語の授業で、「学校にチャイムは必要か」をテーマにして、「必要である」「必要でない」の二つのグループに分かれて討論をすることになった。中村さんは「チャイムは必要でない」、山田さんは「チャイムは必要である」のグループであり、最初にそれぞれのグループから意見を述べ、その後で互いに反論し合うという形式をとった。その討論の一部と、それについての「問い」を一度聞き、答える。

佐藤 司会の佐藤です。では、これから討論を始めます。今回は、授業の始めや終わりなどの時間を知らせるチャイムを取り上げて、「学校にチャイムは必要か」というテーマで討論を進めます。まず、中村さんから、「チャイムは必要でない」という立場で、意見の発表をお願いします。

中村 はい。私たちは、チャイムは必要でないと思います。理由は、「チャイムをなくすことで、自主性が育つから」です。なぜ自主性が育つのか、というと、自分で時間を確認しながら行動するようになるからです。自主性が育つことで、行動が積極的になり、生徒会活動なども今まで以上に活発になる、というプラスの効果も生まれます。

佐藤 ありがとうございます。続いて山田さんから、「チャイムは必要である」という立場で、意見の発表をお願いします。

山田 はい。私たちは、チャイムは必要だと思います。理由は、「チャイムに従って行動することで生活のけじめが身につくから」です。チャイムが鳴ると、例えば授業と休み時間とがはっきり区別されます。そこで気持ちを切り替えることで、けじめのある生活が送れるようになります。けじめのある生活シユウカンを身につけることは、学校の中だけでなく、日常でも基本となる、大切なことです。

佐藤 ありがとうございます。では、山田さんから中村さんへ、反論をしてください。準備はいいでしょうか。では、お願いします。

山田 はい。自主性が育つことと、生活のけじめを身につけることを比べると、「まず生活のけじめの方を先に身につけるべきだ」と思います。私たちが将来、社会に出て行った時のためにも、今から生活のけじめを意識しておく必要があります。そのためには、やはりチャイムによって気持ちを切り替えることが必要です。自主性は、その後で身につけても遅くはないと思います。ありがとうございます。では、続いて、中村さんから山田さんへ、反論をしてください。準備はいいでしょうか。では、お願いします。

中村 はい。「チャイムは必要である」と考えるグループからの反論は、「自主性は、生活のけじめを身につけた後でも遅くはない」でした。私たちは、「まず自主性を身につけよう」とすれば、生活のけじめは自然と身につく」と思います。だから、やはりチャイムは必要でないと思います。チャイムに頼らず、私たち生徒が、自分で次に何をしなければならぬのかを考えながら、学校生活を送っていく過程で、生活のけじめをつける、という意識も高まります。このように、チャイムをなくすことで、自主性と生活のけじめの両方を身につけることができると思います。

① 山田さんの発表の中にあつた「けじめのある生活シユウカン」の「シユウカン」を、漢字に直して楷書で書きなさい。

② 中村さんと山田さんの意見の違いを整理したものととして最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) 中村さんの意見は「チャイムをなくすことで生活のけじめが身につく」であり、山田さんの意見は「チャイムを鳴らすことで自主性が育つ」であつた。

(2) 中村さんの意見は「チャイムを鳴らすことで自主性が育つ」であり、山田さんの意見は「チャイムをなくすことで生活のけじめが身につく」であつた。

(3) 中村さんの意見は「生活のけじめが身につくことで社会に出て行ったときに役立つ」であり、山田さんの意見は「自主性が育つことで生徒会活動が活発になる」であつた。

(4) 中村さんの意見は「まず自主性を身につける必要がある」であり、山田さんの意見は「まず生活のけじめを身につける必要がある」であつた。

③ 中村さんの反論の組み立て方の工夫を述べたものとして最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) 比喩表現を多く使って、自分の主張をわかりやすく伝えようとしている。

(2) 相手と共通する自分の体験を取り上げて、相手の感情に訴えようとしている。

(3) 相手の発言の一部を取り上げて、反論のポイントをはっきり示そうとしている。

(4) 具体的な資料を示して、自分の主張に説得力を持たせようとしている。

注意 字数が指定されている設問では「、」や「。」も一ます使いなさい。

1

【聞き取り検査】放送による指示に従いなさい。答えは、解答用紙に記入しなさい。

2

次の文章は、自然の風景の色彩に心を引かれ、何よりも絵を描くことが好きな中学校三年生の圭海が、姉で高校二年生の曉美から進路のことで厳しく非難され、ケンカをしてしまったその後に続く場面である。圭海はショックのあまり自分の部屋に戻り、机に突っ伏して泣いている。これを読んで、①～⑥に答えなさい。

(私、お姉ちゃんから憎まれてるんだわ。)心が凍りつきそうだった。(これは、ただの兄弟ゲンカなんかじゃない。)お互いに、シユウフクしようのない不信感を芽生えさせてしまったのである。

圭海は思った。もう二度と、曉美の顔を見るのはよそう。何か聞かれても返事もしまし。彼女に対しては、徹底的に無視を決め込むのだ。圭海は固く心に誓った。だが、家族の中にそういう人が一人でもいるということは、なんて不幸なのだろう、と悲しくなるばかりだった。

ドアにノックの音が響いて、誰かが部屋に入ってきた。ノックなんかする人は、祖母以外には考えられなかった。圭海は、机に伏した姿勢をもとに戻して背中を立てた。しかし、祖母の方には振り向かなかつた。ただの兄弟ゲンカに負けて、泣いていると思われれば、はやくである。彼女は、泣き顔を怒り顔に変えて、祖母の出入を待っていた。

「タマちゃん。おばあちゃんね、いいもの作ってみたのよ。」圭海の心とは裏腹に、祖母はうきうきした調子で彼女のもとに寄ってきた。そして、両手で大事そうに包み込んだ丸いものを、彼女のすぐ目の前でパツと開いて見せた。涙に湿った目に、いきなり鮮やかな色彩が飛び込んできた。圭海は激しくまばたきを繰り返す。

それは、いくつもの色彩で、ていねいに巻き付けられた「てまり」なのだった。こんな色美しいてまりを、彼女は今までに見たことがなかった。「御殿まり」というのよ。飾り物なの。」てまりには、束ねられた赤い房が付いている。同じ赤の色彩の地には、星形の模様が大大きく配置されていて、星の中には幾すじもの、とりどりの色彩の帯が並んでいた。

「いろんなのを作ってみたのよ。他にもあるんだけど、よかつたらおばあちゃんのお部屋に見に来ない？」祖母は穏やかに誘いかけてきた。圭海はちよつと目を伏せて、こつくりうなずくと、祖母の後について下に降りて行った。祖母の部屋に入ると、なんだかとても良い匂いがした。お香を焚いているようだった。部屋の隅に積み上げられた衣装ケースのひとつから、祖母はさっきの「てまり」をいくつも出してきた。さつき見せてくれたものと同じサイズのもあれば、夏みかんほどの大きなものや、逆にピンポン玉くらいのかわいらしいのまであった。色彩も実に豊かである。

「どれも好きなの、タマちゃんにあげる。」祖母は、てまりの入った衣装ケースをのぞき込む圭海に、小声でささやきかけた。

「ほんとう？」圭海は、目を輝かせて聞き返す。

「本当はね、全部あなたにあげようと思ってるの。だってタマちゃん、こういうのが大好きでしょ。」祖母は、さっきの曉美とのいさかいの件で、圭海に同情して言ってくれているのだろうか。「タマちゃんは、絵が上手なものね。」なんだか、無理してほめてくれているようだ。

「たいしたことないわ。」圭海が沈んだ声を出すと、「ううん、タマちゃんの絵の才能は、うちのおじいちゃんに似たのよ。」しみじみと、うなずきながら言う。「おじいちゃん？」「そうよ、おじいちゃんもあなたと同じ、とっても絵の好きな人でねえ。ほら、あそここの壁に掛かっているヌノも、おじいちゃんが描いた絵を、おばあちゃんが刺しゅうしたものなのよ。」祖母が指さしたタペストリーは、かなり大きな作品だった。キクやハギやキキョウなど、日本で親しまれてきた秋の花々が、ていねいにデザインされ、ヌノの上に形よくちりばめられている。

「ね、タマちゃんもお花が好きで、前に絵に描いてたことがあったでしょう。だから、やっぱりおじいちゃん似なのよ。」祖母には悪いが、圭海は亡くなった祖父のことを、あまりよく覚えていない。非常に寡黙で、頑固そうな老人だったからだ。このおとなしい両親

から、なぜ父のような賑やかな息子が生まれてしまったのか、圭海は不思議でならない。むしろ圭海の方こそが、この祖父の控えめな性格を受け継いだのかも知れなかった。さらに、圭海の目は、この祖父にそっくりでもあった。「おまえは、水島のおじいちゃん似だな。」と父から言われるたびに、彼女は嫌な気がしたものである。「おじいちゃんは、立派な方だったのよ。」祖母は、部屋の小さな仏壇から、祖父の遺影を取り出してきて圭海に見せた。写真の中のむすつとした顔も、やっぱり圭海に似ていた。祖母は暫く、その写真を両手にとつてながめている。

圭海は思う。(おじいちゃんとおばあちゃんて、きつとすぐく仲が良かったんだろうな。)祖母の部屋のタペストリーが、二人の楽しかった生活を物語っているようにも見えた。(おばあちゃんが今でも尊敬してる、絵の上手なおじいちゃんか……)そんな祖父に似た、口下手な自分のことも、いつか愛せる日がくるのかも知れない。そう思うと少しだけ、凍えかかった気持ちもじんわり緩みはじめてきた。彼女は改めて、祖母の賑やかな部屋をゆつくりと見渡した。(出典 鈴木八栄子「15歳こころの三原色」)

(注) タペストリー——色彩などで風景などを織り出した壁掛け。

① ————の部分の⑦、⑧を漢字に直して楷書で書きなさい。

② 「祖」という漢字を行書で書いたときの「へん」として適切なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) 才 (2) 𠂔 (3) 且 (4) 且

③ 「ちよつと」の品詞名を、漢字で答えなさい。

④ 「泣き顔を怒り顔に変えて」とあるが、圭海がそのような態度をとつたのはなぜか。その理由として最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) 自分が机に伏して泣いていたわけを、祖母に誤解されること
がいやだと思つたから。
(2) 泣いている自分ではなく、きつと祖母は姉に味方するにち
がいないと思つたから。
(3) はしゃいでいる様子の祖母を見ていらだち、徹底的に無視し
てしまおうと思つたから。

(4) 今の自分の悔しい気持ちを、祖母にぶつけることで気を晴ら
したいと思つたから。

⑤ 「圭海が沈んだ声を出すと」とあるが、圭海の返事の声が沈んでいたのはなぜか。その理由を、文章中のことばを使って四十字以内で書きなさい。

⑥ 「彼女は改めて、……ゆつくりと見渡した」とあるが、このときの圭海の心情を説明したものととして最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) 自分と自分の両親との共通点を祖母に指摘されて驚くことに、祖母の生き方への共感が生じている。
(2) 落ち込んでいた心が祖母とのやりとりによって和らぎ、あるがままの自分を受け入れ始めている。
(3) 祖父を尊敬する祖母の姿勢に感動し、自分も姉を尊敬していかねばならないと反省し始めている。
(4) 絵が好きだったという祖父を見ながら、自分も祖母のために絵の才能を磨こうと決意を固めている。

